

「文学」と「文学批評・研究」(2)

——明治期における「文学」の形成過程をめぐる国民国家論(9)——

“Literature” and “Literary Criticism/Study” (2)

——A Study of “National Literature” in Japan as a “Nation State” (9)——

大本達也*

Tatsuya OMOTO

abstract

This paper aims to clarify the role of literary criticism/study in the formation of Japanese literature in early Meiji era. First, we will examine the change of literature's meaning in Japanese until then. Next, we will assess the introduction of Western literature concept in those days. Third, we will discuss FUKUCHI Ouchi's application of it to Japanese writings.

「キーワード」: 小説、戯作、西周、成島柳北、福地桜痴、「日本文学の不振を嘆ず」、

はじめに

本論は、「明治期における「文学」の形成過程をめぐる国民国家論—「国語」または《出版語 printed-languages》の創造と「小説」の台頭(『CAMPANA』10号、2004)を総論とし、各論1-1「英文学」研究者としての漱石・夏目金之助—明治期における「文学」の形成過程をめぐる国民国家論(2) (『CAMPANA』11号、2005)、各論1-2-1「文学」と「文学批評・研究」(1)—明治期における「文学」の形成過程をめぐる国民国家論(8) (『CAMPANA』17号、2011)の続編、各論1-2-2にあたる。

各論1-2-1では、まず、民主主義、言論の自由、自己概念によって支えられた“modern literature”が“nation state”を基盤として成立していることを確認した。次に、西欧における“literature”概念の変遷を検討し、小説を中核に据え、想像力および創造力を重視する“literature”が、18世紀後半に発生した比較的新しい概念であることを検証した(以降、この“literature”概念を「今日的“literature”」とする)。そして最後に、この今日的“literature”においては、「文学批評・研究」が必要不可欠な装置として機能していることを指摘した。各論1-2シリーズでは、以降、近代日本において、この今日的“literature”がどのように導入され、その過程で「文学批評・研究」がいかに機能したのかを具体的に検証していく。

*本学非常勤講師、近現代日本文学・思想 (Japanese Literature in 19-20th Centuries)

まず本稿では、明治初期の1875(明8)年までの時期を取り扱う。1において近代以前の日本における「文学」概念の変遷を追い、2において当時における西洋からの“literature”受容を具体的に考察する。そして、3において福地桜痴による今日的“literature”移入の意義について検討する。

なお、文中、敬称は省略し、引用は《 》、出典は[]、大本による注釈は()、原著者の付した括弧は〈 〉で示した。また、必要に応じて引用文中のルビ(カタカナ)を残し、難読字にふりがな(ひらがな)を付した。

1. 明治初期までの「文学」概念

それでは、日本における「文学」の語義変遷を探っていこう。そのために、『日本国語大辞典』(2001、第2版、小学館)における「文学」の語義を、他の辞書も参考しつつ検討してみたい(とりあげる語義順はこの辞典での掲載順とは異なる)。

まず、一つ目の語義は、

芸術体系の一様式で、言語を媒材にしたもの。詩歌・小説・戯曲・随筆・評論など、作者の、主として想像力によって構築した虚構の世界を通して作者自身の思想・感情などを表現し、人間の感情や情緒に訴える芸術作品。また、それを作り出すこと。文芸。

というものだ。同様の語義として、『広辞苑』(2008、第6版、岩波書店)には、《〈literature〉言語によって人間の外界および内界を表現する芸術作品。詩歌・小説・物語・戯曲・評論・随筆などから成る。文芸》とあり、『大辞林』(2006、第3版、三省堂)にも《〈literature〉言語表現による芸術作品。詩歌・小説・戯曲・随筆・評論など》とある。

我々のよく知る、芸術性を基本価値とし、想像力を重視するこの語義の「文学」は、語義の冒頭に〈literature〉と書き添えられていることからわかるように、18世紀後半の西欧で生まれた“literature”の訳語にほかならない。この今日的“literature”を受けて発生したこの語義の「文学」を以降、「今日的「文学」」と記すことにする。

なお、誤解のないように付け加えれば、この今日的「文学」には近現代文学作品のみならず、古典文学作品も含まれる。たとえば、誕生から1000年近くのあいだ「文学」ではなかった『源氏物語』は、今日的「文学」概念が導入されてはじめて、「文学」と呼ばれるようになったわけだ。そして、その認定過程に関与するのが、各論1-2-1で論じた「文学批評・研究」である。

今日的「文学」の新しさをよく知る小堀桂一郎は、

「文学」といふ語の今日理解されてゐるやうな意味での用法、つまり literature, littérature, Literatur, etc. と同じ概念を表す名辞としての用例は結局明治初年になつてから現れるもので、そのことはつまり今日の「文学」が近代日本語の語彙に登録されたのは、英語の literature の訳語としてで

あつたことを物語つてゐる。

と指摘している[小堀:3]。小堀同様、「文学」の新しさを自覚していた小田切秀雄も、《こんにちわたしたちが使っているような意味での“文学”ということば、またはそれにあたるべつのことばは、明治初年までは存在しなかった》[小田切:23]と断言している。

では、この語義が現れる近代まで、日本では「文学」という言葉はどのような意味で使われていたのだろうか。最も古くからのものとして、「学芸。学問。また、学問をすること」という2つめの語義がある。用例としては、8世紀の『懐風藻』や14世紀の『神皇正統記』をはじめ、17、18世紀の用例、そして福沢諭吉(1835-1901)の『西洋事情』(1866-70)での用例などが挙げられている。このことから、この学問一般をさす「文学」こそが、古代から近代に至るまで長く一般的に用いられた語義だったことがわかる。

ところで、小田切が《“文学”ということばじたいは、古代に中国からとり入れて使っていた》と指摘しているように[同]、他の多くの漢語同様、「文学」という言葉は中国伝来のものである。事実、この語義にも『論語』の用例が示されている。そこで、中国において「文学」という言葉がどのような意味で用いられてきたのかを簡単に見てみよう。

鈴木貞美によると、漢代中国では、「文学」は《経書を中心にする学問》のことであつたらしい[鈴木:72]。それが、中世に、儒学だけではなく、老荘学、仏教などを含めた学問一般に意味を広げ、さらに《文章の能力を含む》概念に変化し、《「文」と「学」》を兼備しているという意味と《「文」の「学」》という意味の両義に用いられるようになったという[同:74]。そして、宋代になり、《経学を離れる傾向》が強まったらしい[同:78]。このように、中国における「文学」は、学問一般および文章学という意味で用いられてきたようだ。

日本語の「文学」の3つめの語義として、《「ぶんしょうがく〈文章学〉」に同じ》というものがあるが、これは、中国語での《「文」の「学」》という「文学」概念を受けたものと考えられる。では、明治以前の日本において学問一般および文章学としての「文学」の対象とは何だったのだろうか。

ここで、総論で引用した和田繁二郎の説明を再録しよう[和田:13-4]。《中国伝来の「文学」の語義》が《「学問・学芸」の意》に用いられた明治期以前においては、「文」とは《儒教の教》を指しており、それらを学ぶことこそが「文学」であつた。とりわけ江戸期においては、《内容としての「文」》、すなわち儒学の《思想・内容を学ぶ》という意味と、《形式としての「文章」》、つまり《文章を作ること》を意味するという《二面性》を持っていた。

この和田の指摘によると、明治以前の日本における学問の対象や学ぶべき文章とは、漢文に限られていたようだ。小田切も、近代以前の「文学」とは、《中国の経・史等についての学問、文についての学、武学にたいする文学、という意味が主》だと述べている[小田切:23]。このように、近代以前の「文学」は、学問一般、とりわけ儒学を対象とした学問、および漢文に関する文章術を指していたのであり、日本語による著作および作文術は、「文学」の対象からは除外されていたわけだ。それでは、この「文学」の対象となる中国語著作に、詩や小説、戯曲は含まれていたのだろうか。

まず鈴木はこう述べる[鈴木:72-9]。漢代の「文学」は経書を中心としていたが、六朝期にはすでに「文学」に詩文が含まれるようになっていた。その一方で、当時流行した散文による一種の怪異伝や人物評判記は「文学」と呼ばれなかった。また、唐代に流行した「伝奇」も《けっして詩文に比肩するようなもの》と認定されることはなかった。宋代には、韻文を「詩」、散文を「文」と呼ぶことが一般化した。が、「小説」は「文」とされず、《歴史書として信じるに足りないもの》や《学問からはみ出したものを収める器の名称》だった。また、元代に「元曲」と呼ばれる演劇が流行したが、やはり《「文学」や「文章」の範疇に入られることはなかった》。このように、小説、戯曲を含む「文学」概念は近代以前の中国では成立していないのであり、日本においても当然「文学」とはされていないのである。

では、残りの語義も見てみよう。まず、4つめの語義として、「詩・小説・戯曲など、文学作品を研究する学問」というものがある。『大辞林』では《詩・小説・戯曲など文学作品を研究する学問。文芸学》、『大辞泉』でも《詩歌・小説・戯曲など文学作品を研究する学問》となっている。これは本論で言うところの「文学批評・研究」に該当し、今日的“literature”概念を受けて成立した概念である。

次に、5つめの語義として《令制で、内親王を除く有品親王に一人ずつ付けられ、経書を講授した官人の職名》というものがあるが、これは『広辞苑』に《律令制で、親王家に官給された家庭教師》とある語義と同じだ。『大辞泉』には《律令制で、有品の親王に経書などを講授した官吏の職名》とある。『大辞林』では《律令制で、親王家で経書を教授することをつかさどった職》となっている。日本の徳川期では、將軍付きの儒者、いわゆる奥儒者をさし、幕末の奥儒者には、たとえば後述する成島柳北(1837-84)がいる。

そして、《江戸時代、諸藩の儒者》という6つめの語義がある。小田切は《中国の経・史等》および《文》についての《学問職の者》と説明している[小田切:23]。鈴木は《経書を講じ、公式文書の管理著作にあたる官職》および《藩校で儒学を講ずる教授》の呼び名であるとし、儒学一般や漢詩文を学ぶ者をも指したと解説している[鈴木:94]。このように、儒学者およびその徒弟はひとまとめにして「文学」と呼ばれていたわけだ。

最後に、《自然科学・政治学・法学・経済学等以外の学問》、すなわち今日的「文学」や《史学・社会学・哲学・心理学・宗教学などの諸分科を含めた称》という7つめの語義がある。『大辞泉』に《自然科学・社会科学以外の学問。文芸学・哲学・史学・言語学など》とあるように、これは大学の「文学部」という用法に代表されるものであり、学問一般をさす用法がその領域を狭めたものだ。明治期に入ると、学問一般をさす「文学」から、まず自然科学が、それから社会科学、さらに人文科学の中でも歴史学、哲学が漸く脱するというふうに、「文学」は次第にその領域を狭めていく。それゆえ、時期により、人により、状況により、「文学」の意味するところが変わってしまう。このことが近代における「文学」概念のあいまいさの一因となっている。

以上のように、近代以前の日本においては、学問一般を意味する語義2の「文学」および語義3の文章学が主流であったのであり、その対象は漢文献およびそれらに関する著作に限定されていた。柳田泉が

正直にいふと、徳川時代では、戯作小説や芝居は文学ではなかった。いな、本質的には今日の文学のもつ

とも近いものであつたけれども、当時は文学として扱われていなかったわけだ。戯作小説芝居などは文学以下と見られてきた。

と述べているように[柳田 a:396]、日本語で書かれた小説、戯曲などは、もちろん「文学」に含まれていなかったのである。

では、和歌はどうか。鈴木は、

漢詩と和歌は古代から幾度か様相は変わるものの、長い間、基本的には支配層のものであり、「詩歌」と並べて呼ぶ風習もあった。が、「文学」といえば儒学と漢詩文をさす言葉であり、和歌は、その範疇になかった。

と明言している[鈴木:156]。このように、明治以前においては和歌をはじめ、そこから派生した連歌、俳諧も「文学」に含まれていなかったのである。各論 1-1 において、漱石の『文学論』(1907)の分析から、明治中期に至ってなお今日的「文学」の概念が根付いていなかったことを確認したが、漢学を対象とする古来の「文学」概念は、明治に入ってもなお続いてゆくのである。

2. 明治初期における“literature”受容

それでは、“literature”概念はいつ、どのようにして日本にもたらされたのだろうか。

小田切は、《現在においてのような意味の“文学”の観念を最初に日本に紹介したのは、津和野出身の啓蒙学者西周(1829-97)》であるとしている[小田切:23]。総論でも考察したように、開化期において“literature”という西洋語を最も早く紹介したのは西である。けれども、西が解説する“literature”は人文学全般をさす概念をほとんど出ていない。西は旧来の“literature”概念を紹介したに過ぎないのであり、西をもって今日的“literature”の初移入者とする小田切の説は当たらない。西の位置づけは西洋語“literature”の紹介者といったところが適切だろう。

ところで、これも総論で触れたのだが、小説の発展は新聞の拡大と連動している。そのため花袋・田山録弥(1872-1930)は、1892(明 25)年の『明治小説内容発達史』で《明治 56 年(1870-1)の頃は民間に新聞雑誌が競ひ起つて、当代の文章に携はる者は筆を載せて多く新聞社に入った》が、その中でも『東京日日新聞』の福地桜痴(1941-1906)と『朝野新聞』の成島柳北が《共に相拮抗して新聞界の双璧と謳はれ》たと述懐している[田山:4-5]。西洋通のこの 2 人はいずれも西洋の“literature”をめぐる言説を残している。まず、柳北から見てみたい。

奥儒者、すなわち「文学」であった柳北は、維新後欧米を巡回し、帰国後の 1874(明 7)年に『朝野新聞』を創刊、ジャーナリストとして名をはせる。その柳北には、その跡をとって奥儒者となり、明治以降文名を競った友人、三溪・菊池純(1819-1891)がいる。三溪は 1872(明 5)年に東京に遊び、その風俗を漢詩 18 首に詠み、それらをまとめた『東京写真鏡』を 1874(明 7)年に発行する。柳北はそこに序文を寄せ(おそらく

前年に執筆)、そこにこう書いている[斉田:157]。

《全地球上》、《而未曾有無詩賦之國也》、この地球上にはまだ詩のない国はなく、《若歐米諸國稱文明者、有皆詩學、有皆詩人》、西洋で文明国と称する国には、皆詩学があり、詩人がいる。《頃年本邦士人、多修泰西之學、考究物理、採摘法律、凡百之學科無不學》、近頃は多くの教養人が欧米の学問をし、学ばない学科はないほどだ。それが、《而獨於詩賦、則擯斥以為無用之物者、十居八九》、詩のみを無用とするものが10人中8、9人もいる。《余甚疑焉、夫我邦之詩賦、猶泰西之詩賦、固弗論文字之異動也》、私は、わが国の詩と西洋の詩における《文字》の相違がもともと論じられていないのではないかと大いに疑っている。《余窃有欲用力於詩賦、以與泰西諸名家並立之志》、私は詩に力をそそぎ、西洋の大詩人たちと肩を並べたいとひそかに思うのである。

ここで柳北が漢詩をもって《我邦之詩賦》と呼んでいるところには、漢詩が日本、あるいは東洋の《文字》、すなわち「文学」なのだという旧来の「文学」観が反映している。けれども、《文字之異同》という言葉は、ずっと後に漱石が感じることになる、両洋における「文学」概念の相違を柳北が早くも意識していたことを示す。各論1-1で引いた漱石の言を再び引こう。

之(英文学)ヲ修ムルノ始メ文学トハ如何ナル者ナルカヲ知ラズ只漢文漢詩ノ如キ者ト思ヘリ漢文漢詩若クハ日本ノ文学書ヨリ得タル茫漠タル文学テフ觀念ハ何レノ国ノ文学何レノ時ノ文学ニモ応用スベシト思ヘリ漸ク書ヲ読ムニ從ヒ英文英詩ナル者ノ吾ガ予期セル趣味トハイタク異ナルヲ発見シ、又其異ナル點ニ於テ毫モ趣味ヲ解セザルニ氣が付キタリ [夏目:77]

漱石が漢文漢詩という旧来の「文学」観と《英文英詩》との《趣味》の相違に困惑し、その究明のために『文学論』を書いたのは明治末期のことである。一方、柳北が東洋と西洋の《文字之異同》を理解しつつ、西洋の《諸名家》に並び立つ詩人たろうという野心を抱いたのは明治初期のことである。明治の終わりに至るまで漱石を悩ませていた両洋の「文学」の相違を、柳北は明治のはじめにすでに認識していたのである。

ただ、柳北が西洋の今日的“literature”概念を正確に理解していたかは疑わしい。それは、漢詩を《我邦之詩賦》とする理念には、一国家・一言語・一文学という“National Literature”の概念が反映されていないからである。柳北は東洋人的見地から《泰西之詩賦》に対し《我邦之詩賦》を擁護し、文人的精神から《凡百の学科》に対し《詩賦》を擁護した。すなわち、柳北は近代に対し、前近代的を擁護したのである。それゆえ、柳北を今日的“literature”の受容者、導入者と位置づけるよりも、その先覚者として位置づけることが適切であるだろう。

さて、当時の今日的“literature”の受容、導入において最も重要なのは、もう一人のジャーナリストの先駆者、福地桜痴である。まず、その略歴を記そう [柳田b:410-1]。

長崎に儒医の子として生まれた桜痴・福地源一郎は《天才的早熟児》であり、10歳になる前に《奇童神童》と呼ばれたという。12歳で『皇朝二十四考』を漢文で著し、15歳より学んだ蘭学で1年足らずで稽古通弁となった。1858年、江戸へ出て英学を修め、翌年より通弁御用として幕府に仕えた。1861年、1865年

の2度、幕府使節団として洋行し、帰朝後、外国奉行支配調役格、通弁御用頭取となった。維新の1868(明1)年、『江湖新聞』を発行して佐幕の論陣を張り逮捕される。が、多くの人の尽力で釈放され、1870(明3)年、大蔵省に入省、3度目の洋行で渡米。翌年には岩倉使節団に加わり4度目の洋行。1873(明6)年に帰朝し、翌年、官吏を辞し『日日新聞』に入社、1888(明21)年に退社するまで主筆、社長として筆を振るう。

この経歴で留意してほしいのは、桜痴の欧米体験の豊富さのみならず、官界からジャーナリズムへの転進という行路である。当時、ジャーナリストの社会的地位は低かった。にもかかわらず、桜痴は漱石に先ずること30年余、官吏からジャーナリストへの転進を果たした。実際、友人らは《戯作者の魯文輩と肩を並べるとは何事だ》と桜痴を止めにかかったと言う[同]。後に言及する仮名垣魯文(1829-94)ら戯作者の多くは、維新後その文才を生かし、ジャーナリズムに活路を見つけていたのである。桜痴は、新聞社に入ることについて《イヤ魯文は魯文、桜痴は桜痴だ》と意に介さなかったらしい[同]。

その桜痴が、1875(明治8)年、『東京日日新聞』に発表した「日本文学の不振を嘆ず」こそが、今日的“literature”概念をはじめて日本に移入し、「文学批評・研究」のさきがけとなった文章なのである[福地:342-3]。では、その内容を具体的に検証してみよう。

3. 福地桜痴「日本文学の不振を嘆ず」

桜痴は「日本文学の不振を嘆ず」の冒頭を《日本の文字の衰えたるや久し》と始める[福地:342]。そして、皆、日本は今ほど栄えていたことはなかったと賞賛するが、《日本の文字の日々に衰えること》については《嘆息》するばかりの状況だと言う[同]。この文でも、《文字》と《文学》がほぼ同義で用いられているが、その内容は柳北とは大きく異なる。

桜痴は《日本文学の不振》の理由を5つ挙げる。1つめの理由は、《維新の歴史なき》ことである[同:342]。桜痴は、日本は《平常の日本人に読める文章》で書かれた《歴史》のない国であり、《全備したる史編》は《悲しひかな漢文にて書かれたり》と嘆く。そして、欧米においても《中世まで、英国の歴史なども羅^{ちてん}甸語で書きし例もあれば、日本史を漢文にて書きたるが悪い》とは言わないし、それどころか《文学の開けたる》証拠でもあるとする。それでも、これまでは《乏しいながらも》《一部の歴史や軍書》があったが、明治維新以降、全く《歴史》が出ていない。すなわち、《日本の文学の衰えたる今日に極まりたる》のであり、その証拠は《維新の歴史なき》ことであると断じるのである。

ここで、桜痴が《歴史》と呼んでいる著作には、『日本書紀』『大日本史』『日本外史』などの漢文で書かれた歴史書のみならず、日本語による『平家物語』や『源平盛衰記』、『太平記』、『太閤記』などが含まれる。後者について桜痴は、これらは《立派に》《日本の正史》と言える書物なのか疑問であり、もしかすると《演義、稗史》の部類に入るかもしれない、けれども《文華の乏しき国》のことでそうそう贅沢も言えないため、仮に《歴史》に入れるとしても、ひとまとめにしても《高の知れたる著述》に過ぎない、としている。ちなみに「演義」とは、通俗的歴史書をさす(たとえば中国の『三国志演義』など)。

たかだか8年に過ぎない明治の治世についての《歴史》＝歴史書が存在しないことが嘆かわしい、というのはジャーナリズム的誇張としておいておくとしても、歴史書を「文学」としていることには、やはり今日

的「文学」の概念から外れるような感じを抱くかもしれない。けれども、前述したように、本来「小説」とは、《歴史書として信じるに足りないもの》を《収める器の名称》だったのであり、「稗史小説」と言われるように、正史ではない歴史書は、民間の歴史書たる「稗史」とされてきたのである。

『平家物語』や『源平盛衰記』、『太平記』、『太閤記』は、今日では今日的「文学」の範疇に属しているが、桜痴は、正史ではなく《演義、稗史》の部類に入るような、《平常の日本人に読める文章》で書かれた《高の知れたる著述》を早くも「文学」と認定しているわけだ。その意味では、桜痴は、今で言うところの歴史小説を日本で初めて「文学」に取り込んだと言えるのである。

桜痴は、ギボン(Edward Gibbon, 1737-1794)の『ローマ帝国衰亡史』やマコーリー(Thomas B. Macaulay, 1800-59)の歴史書を原書で愛読している[柳田b:416]。桜痴が日本語という俗語による歴史小説を「文学」に組み込んだことに、西欧における俗語革命によって台頭していた今日の“literature”の概念の反映を見ることは容易だろう。

《日本文学の不振》、2つめの理由は、小説の不振である。桜痴はこう述べる[福地:342-3]。《小説伝奇の類》は《公正に論じたらバ利が七分で害が三分ぐらい》である。けれども、《情意を写す》《細密》さと《読者をして喜怒の感を発せしむる文章》の絶妙さにおいては《小説を以て文学の魁首と成すべき》だ。そして、『竹取物語』や『栄華物語』、『伊勢物語』、『源氏物語』などは《古文にて今日の世界に通用せぬとしても》、山東京伝以降、『馬琴、種彦、一九』が出て、さらに《春水、有人、魯文》なども輩出している。これらの作家が《日本の風習》のために《下等に位せられたること》はしかたないとしても、彼らの《文学》への《功労》は、《歴史家の学者》に劣らない。それが、この10年来、小説は《微々として振》わず、今日では《全く廃絶したる姿》となっている。これこそ《文学の大衰微の兆》なのである。

ここで桜痴が挙げている作家のうち、明治に入っても活動しているのは《春水、有人、魯文》の3者である。《春水》は、後の2人と同時期の作家と考えられるから、おそらく二世為永春水・染崎延房(1818-86)だろう。二世春水は、幕末の『室町源氏胡蝶巻』(1864)以後、明治期にも『厚化粧万年島田』(明1)、『白雪美談・時代加賀實』(明3)、『雑談雨夜質庫』(明6)、『新局九尾伝』(明7)と書き続け、1875(明8)年には『東京絵入新聞』の記者となっている。

また、《有人》、すなわち山々亭有人こと条野菊探(1832-1902)も、『春色江戸紫』(1864)、『春色 廻 染分解』(1865)、『花暦封じ文』(1866)、『春色玉襷』(明1)、『誠忠義士・烈々伝』(明2)、『柳蔭月朝妻』(明3)、『仮名読太閤記』(明4)、『藪黄鳥八幡不知』(同)、『池園もの語』(明5)と幕末から明治にかけて旺盛に執筆し続けている。

ただ、戯作者としての山々亭有人は今日忘れ去られた感があり、日本画家・鏑木清方の父と言ったほうが通りがいいかもしれない。その有人は、明治5年(1872)、貸本屋番頭・西田伝助(1838-1910)、浮世絵師・歌川芳幾こと落合幾次郎(1833-1904)とともに、日本初の民間日刊紙『東京日日新聞』を創刊した。この新聞は、岸田吟香(1833-1905、洋画家・岸田劉生の父)、そして桜痴というスター記者を生み出した。そして、まさにその紙面にこの画期的な「文学」論が発表されたのである。

最後に、《魯文》だが、先にも触れた仮名垣魯文こと野崎文蔵も、幕末の『滑稽富士詣』(1860)から始ま

り、明治に入っても『薄緑娘白波』(明1)、『西洋道中膝栗毛』(明3)、『牛店雑談・安愚楽鍋』(明4)、『河童送伝・胡瓜遣』(明5)、『倭国字西洋文庫』(同)、『大洋新話・蛸之入道魚説教』(同)、『佐賀電信録』(明7)と、その健筆振りは衰えていない。魯文もまた、1874(明7)年、『横浜毎日新聞』に雑報記者として入り、翌年には編集者として『仮名読新聞』を創刊するなど、ジャーナリストへと轉身している。

以上のように、桜痴の挙げた戯作者たちが明治以降も小説を書き続けているにもかかわらず、桜痴に《微々として振》わず《全く廃絶したる姿》と映ったのは、やはり戯作人気が衰退していったためであろう。けれども、それがために、戯作者たちは次々と新聞界に打って出るのであり、そのことが後の小説の隆盛につながってゆくのである。いずれにせよ、平安期の物語や徳川期の戯作小説を「文学」と呼んだ例は桜痴以前にはなかったのである。同年、同じ『東京日日新聞』に掲載された「文論」に桜痴はこう書いている[同:345]。

吾曹ハ毎ニ曰フ、日本ノ四代奇書トモ称スベキ大文字ハ、馬琴ノ八犬伝、種彦ノ田舎源氏、一九ノ膝栗毛、春水ノ梅暦、ナリト。

此四書ハ(正理道徳ニ背クト否トヲ措キ)、皆ヨク細微ノ情意ヲ写シ尽シテ余蘊ナク、読者ヲシテ喜怒憂楽ノ感ヲ発セシムルニ於テ、更ニ欧米支那ノ作者ニ一歩ヲ譲ラザルベシ。

このように、桜痴は『南総里見八犬伝』や『修紫田舎源氏』、『東海道中膝栗毛』、『春色梅暦』などの小説を、中国や欧米のものに劣らぬ「文学」とした。その背景には、それぞれの国には、それぞれの言葉による、それぞれの「文学」があるという理念がある。すなわち、桜痴は“National Literature”の概念を、初めて日本にもたらしたのである。

《日本文学の不振》、第3の理由は、義太夫などの語り物、長唄などの歌い物の不振である[同:343]。桜痴は《演劇院本》すなわち《義太夫丸本》について、《今時に至りてハ作家全く地を払》った状態であると、《何んぞ之を以て文学の大衰兆なりと云はざるを得んや》と嘆く。さらに、《豊後、長唄、端唄》なども《今日の作》は《猥雑なる唱歌のみ》であり、これもまた《文学の衰たるより生ずる》のであるとする。

《義太夫丸本》は義太夫節のテキストであって、《演劇院本》は今日の戯曲に相当する。桜痴は、浄瑠璃のみならず、そこから派生した豊後節、関わりが深い長唄、さらに俗謡たる端唄までもひっくり返して論じているが、それは当時、これらが同一ジャンルに属すると考えられていたからである。とりわけ後者の歌い物が、西洋概念の影響を受け「邦楽」として「音楽」の一種に位置づけられるようになるのはずっと後のことだ(各論4「日本における「詩」の源流としての「唱歌」の成立—明治期における「文学」の形成過程をめぐる国民国家論(7)」[『CAMPANA』16号、2010]参照)。

さらに桜痴は、《演劇院本》=戯曲を、小説と並び《文学中に於て最も貴重すべき者なり》とし、近松門左衛門を《英のセーキスピアルに比する》とたたえる。小説および戯曲というフィクションを「文学」の中核に据える桜痴の「文学」概念が、想像力を重視する今日的“literature”を背景とするものであることが、シェイクスピア(William Shakespeare, 1564-1616)を引き合いに出していることではっきりと確認できるだろう。

4つめの理由は詩歌の不振である〔同:343〕。桜痴は《和歌、連歌、俳諧は是れ日本の詩なり》とする。今日《流行の開化先生》は《詩学は文学の一部に非ず》などと言うが《何をか云はんや》である、《蛮夷と雖ども詩を賦す》^{いえ}のであり、《文学を重ずべき開化の人民》たるものはむろんである、和歌や連歌、俳諧が《今日に寥々たる》のも《文学の衰に関係》するのだ、と論じるのである。

実は、今日における「詩」および「詩歌」の概念は西洋の“poem”に基く概念である。近代までは「詩歌」と言ったとき、「詩」は漢詩を、「歌」は和歌を指した。このように漢詩と和歌は同ジャンルのものと意識されてはいたが〔鈴木:83〕、漢詩が「文学」に属するのに対し、和歌は「文学」に属さなかったのである。

ここで、桜痴が《蛮夷と雖ども詩を賦す》としたことには、柳北の影響があるのかもしれない。それでも桜痴は、和歌や連歌、俳諧を《日本の詩(=poem)》と明快に定義した。『新体詩抄』(1882、明15)に先んじること7年、桜痴は日本で初めて今日的「文学」としての「詩」を発見したのである。

最後に《日本文学の不振》の5つめの理由は、外国語での作文力、学力の不足である〔福地:343〕。《漢書の御蔭を以て文学の稽古を致せし》という桜痴は、《今の英学仏学に従事する先生輩》は《漢学儒者を糞の如く、味噌の如くに軽蔑》するが、《大家と云はれたる儒者は文を草し、詩を賦し》、独力で書を著した、それがいまだに《英仏の語を以て文を草し、詩を賦したる事を聞かず、其著書あるを見ず》と洋学者をあげつらう。そして、維新以来、書籍の出版は《日本未曾有の盛事》であると《世の論者》は言うが、そのほとんどが翻訳書であって、《自己の学力より出でたる著述》でないのみならず、そのほとんどが抄訳である、また著書もそのほとんどが西洋のもの^{ブック}と比較すると《書冊》とも呼べない《小冊》^{パンフレット}に過ぎない、すなわちこれは《文学の不足より生ずる所の弊なり》と断ずるのである。

この痛快な風刺における「文学」の用法は、学問全般、文章学という古来の概念に近い。それでも、その学問の対象は漢学に限定されていない。ここでの「文学」は洋学をも含む、より広い概念として用いられている。そこには一種の文化相対主義が見られるのである。

以上見てきたように、桜痴の「文学」概念には、今日的「文学」の中核理念たる「芸術としての文学」という理念がほぼ見られない。だが、今日的“literature”概念を背景にして、桜痴は日本で初めて日本語による著作を「文学」と定義した。すなわち、小説や戯曲などのフィクションをその中核に置き、和歌や連歌、俳諧を日本の「詩」としたのである。桜痴のこの論はただちに世に受け入れられたわけではなかった。それは、その言説が時代を大きく先取りしたものであったためにほかならないのである。

おわりに

柳田は、桜痴は徳川幕府に仕え、公用として洋行するようになって、《何としても戯曲や小説に近づかないわけにはいなくなった》と指摘している〔柳田b:418〕。桜痴自身の回想によると、欧米では公的な使節は劇場に案内されるのが常であり、上役に説明できるよう、前もって芝居の筋書きを頭に入れておかなければならない、そこで観劇前には必ず脚本を読むようになった、それが高じていろいろな作家の脚本をあさって読んだ、それが縁で小説も読むようになった、ということである〔柳田b:418-9〕。そういう次第で、桜痴は、幕末においてすでに、シェイクスピアのみならずシラー (Friedrich von Schiller, 1759-1805) やリッ

トン(E. Bulwer Lytton, 1803-73)、シェリダン(R. B. Sheridan, 1751-1816)などを読破していたのである[同:419]。

そして柳田は、桜痴は《独自の眼識と実地観劇の経験で、早くも西洋戯曲を批評的に解釈し、詩詞ではシェークスピアが古今第一、シルレルがこれにつぐが、実地上演の効果ではシェリダンに及ばない。シェリダンこそ今日第一の作家であると考えに至った》とする[同]。明治初期において、西洋のフィクションに最も精通していた——原典で読み、原語で観劇していた——日本人のひとりが桜痴だったのであり、「文学批評家・研究者」のさきがけたる桜痴が、最も早く今日的“literature”概念を移入したことは当然の帰結だったのである。

参考文献

- 小田切秀雄(1975)『現代文学史・上巻』集英社
- 小堀桂一郎(1975)土方定一編『明治文学全集79・明治芸術・文学論集1・月報82』筑摩書房
- 斉田作楽編(2010)『東京写真鏡・他全7種』太平書屋
- 鈴木貞美(1998)『日本の「文学」概念』作品社
- 田山花袋(1982)「明治小説内容発達史」平岡俊夫監修『明治大正文学史集成6・明治小説文章変遷史/明治小説内容発達史/明治文学変遷史講話』日本図書センター
- 徳田秋声(1982)「明治小説文章変遷史」『明治大正文学史集成6・明治小説文章変遷史/明治小説内容発達史/明治文学変遷史講話』
- 夏目漱石(1996)『漱石全集26巻』岩波書店
- 成島柳北(1897)『柳北全集』博文館
- 福地桜痴(1966)「時事論集」柳田泉編『明治文学全集11・福地桜痴集』筑摩書房
- 柳田泉(1966a)「明治新政府文芸政策の一端」興津要編『明治文学全集1・明治開花期文学集1』筑摩書房
- (1966b)「福地桜痴」『明治文学全集11・福地桜痴集』
- 和田繁二郎(1973)『近代文学創成期の研究—リアリズムの生成』桜楓社